

# まちの情景と建築

田中 修一

日本編

リゾート

東海道の置き土産 相模湾／富士山



火山国日本は温泉の宝庫だ。リラックスするにふさわしい観光地は全国に限なくある。新婚旅行のメッカと言えば、嘗ては熱海・指宿が双璧だったし、その後はご婦人方に人気の湯布院や別府がある。しかし地中海のリゾート地に対抗するとなると少し様子を変える必要がある。まずは温暖で風光明媚な海岸を探す。

多くの人口を背景に持つ海岸リゾートとして、太平洋岸では伊豆半島と三浦半島沿岸がある。この二つの半島に囲まれた穏やかな海が相模湾だ。温泉が豊富で気候も温暖、海や山の新鮮な食材にも恵まれている。比較的砂浜は少ないのだが、その分起伏に富んだ海岸線は、エリアごとにリゾート地としての特徴がある。

ヨットの本場は三浦半島の葉山だろう。江の島、鎌倉にも近く、雄大な富士山を一望できるロケーションは、マリンスポーツを楽しむのにふさわしい。対岸の伊豆半島の東海岸に目を転ずると、修善寺、河津、下田、東伊豆町などが連なって、それぞれに特徴のある風景で人気を博している。しかし豪華さの点では、とてもものことに地中海には敵わない。なぜか。



地中海はヨーロッパ文明の発祥の地としての歴史的な蓄積があること、イタリアを中心に15世紀にルネサンスの花が咲いたこと、1730年のイギリスに始まる19世紀の産業革命を経験していること、などの条件が背景にある。これらの要因が、貴族や上流階級だけでなく、広く市民にリゾートやレジャーと言った余暇の意識が生活に取り入れられる原動力になった。

我が国は中国文明に倣って成長してきたので、甲板を張った外洋船舶(お椀の船では一溜りもない)による航海術が育たなかった。(中国では明の永楽帝のとき、宦官の鄭和提督が1405～33年にかけて前後7回アフリカまで船団を仕立てたことがあったが、そのときだけで終わっている)中国は陸の国なのだ。本来海洋国であるはずの日本は、中国に見習うのではなく独自の路線を行くべきだった。儒教道徳を政治支配の根本においた徳川家康は、国家の安泰を図るあまり鎖国政策に固執した。ヨーロッパに後れた最大の原因がここにある。一方で明治になって富国強兵策で列強に追い付くことに必死になった日本人には、自らに余暇を浸透する余裕はなかった。経済発展が最優先だったために、伊豆や房総の半島は幹線輸送路から外れ、温泉地はローカル地方に置いてけぼりを食った。とても豪華さを競うところではない。

とはいっても、日本は観光立国として世界にアピールしようとしている。春夏秋冬/風光明媚/伝統と格式/清潔な空気と水/防犯上の安全/おもてなしの心、など世界に誇るものが数多くある。独立峰富士山はその象徴だろう。こうした遺産を手にも、世界に胸を張るためには、足元から日本人のマナーを見つめなおす心がけも、一方では必要でもある。唾を吐かない、吸い殻や空き缶を捨てない、他人への思いやりを忘れない、など耳が痛い向きもあるのではないか。柿田川の湧水は実に美しいが、その源の富士山がゴミだらけでは困る。

